九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

筒井康隆「夢の検閲官」と山東京伝『廬生夢魂其前日』

園田, 豊
北九州大学 : 助教授

https://doi.org/10.15017/4741971

出版情報：雅俗. 9, pp.137-149, 2002-01-30. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：The pictures in this paper are hided because of copyright protection.

KYUSHU UNIVERSITY

〈研究ノート〉

筒井康隆「夢の検閲官」と山東京伝『廬生夢魂其前日』

園田　豊

I

断筆宣言も撤回され、益々の御健筆・加えて俳優としても御活躍されている現在の筒井康隆氏（最近「筒井康隆パフォーマンス」というビデオを見ました。御自作「魚籃観音記」の宣伝ビデオのような印象を受けました。）にとって、この「夢の検閲官」という作品は短編でもあるし、遠い過去にお書きになったものであるから、今更この作品について論じてみる行為は、既に時宜を逸しているのかもしれない。だが、昔の作品であるから、それに対する作者の愛着がなくなっているとは限らないだろう。この作品の成り立ち（二度リライトされている）を、筒井氏自身が語っている文章を読めば、逆に今でも十分な愛着を抱いておられることと筆者には思われる。そこで、この作品をテーマに、筆を執ってみることにした（別に論文を書くのに、このようなくだくだしい理由はいらないのだが）。その氏の文章とは、

これ（園田注、「夢の検閲官」）は今年の正月（園田註、昭和六十二年一月七日）に発表したのだが、なにしろ新聞のことだから厳密に枚数制限があり、説明不足に陥った。心理学者ひとり、心理学関係図書を大阪で出版している人ひとりから面白いという反響があっただけであり、妻などは「気ちがいの書いた小説」という批判をした。

この「夢の検閲官」（単行本『夜のコント・冬のコント』所収。初出『毎日新聞』昭和六十二年一月七日夕刊。加筆訂正定稿版『小説新潮』昭和六十二年十二月号。再録『夢探偵』（光文社〈一九八九年六月〉＝新たにフロイトの夢理論に関する作者の注を付す）を読んだ時の筆者の感想は先の方々とは少し異なっていた。筆者は、この作品の着想が近世後期の戯作者山東京伝の著わした黄表紙『廬生夢魂其前日』（寛政三年〈一七九一〉刊）と酷似していると思ったのである。果たしてこの両者の着想の相似は、偶然の出来事であろうか。いや、そうではあるまいと、やや偏執質である筆者はこだわり、考えざるを得なかった。筒井氏は「夢の検閲官」を執筆される以前に『廬生夢其前日』を読まれたか、あるいはストーリーをどなたかから仄聞する機会を

持たれたのではなかろうか。そして、しばらく経って、垂水銀座のパチンコ店（まだ、あのパチンコ屋はあるでしょうか。）でパチンコ玉を弾いているうちに、氏のいわれる「フラグメント」（『狂気の沙汰も金次第』。『着想の技術』〈新潮社〉）がうまく形を結んでこの「夢の検閲官」という作品ができあがったのではないか。

この推測は、全く筆者の夢想ではないように思う。

ミステリのみならず、SFもお書きになっていた作家の都筑道夫氏が、「日本古典文学全集」（小学館）第四十六巻『黄表紙・川柳・狂歌』の月報（昭和四十六年九月）に記されている次の文章をお読み戴きたい。

（前略）山東京伝の「盧生夢魂其前日」や「世上洒落見絵図」の発想は、SFにも通ずる。ヘンリィ・カットナーやロバート・シェクリィ、J・G・バラードの短編を、はじめて読んだとき、私は黄表紙を連想した。（後略）

この文章を都築氏と同じく「日本SF作家協会」に所属されていた筒井氏が読んだ可能性は大いにある。いや、読んでいない筈はないと筆者は思う。というのは筒井氏の「幼年期の中ごろ」一九六四年十二月十一日（『腹立半分日記』所収）の項には、SF同人達の会話として、

眉村（卓）氏「筒井さんはブラウン（園田注、アメリカのミステリ・SF作家フレドリック・ブラウンのこと）の線を狙った方がいい」柴野（拓美・SF作家）氏「いや。そういっては筒井さんが可哀想だ。やっぱりシェクリィである。」伊藤（典夫・翻訳家）氏「シェクリィだ。テンポがのろくて場面転換のないシェクリィだ」その通りと思う。

と記されてあるからだ。

ロバート・シェクリィを意識し、自任もされていた若き日の筒井氏が、当時「日本SF作家協会」の重鎮であった都筑氏のこの一文を見て、氏がここに紹介している山東京伝の二作の「黄表紙」の内容に興味を抱かなかった筈がない。

という訳で、以下に記すのは、およそ二百年の時を隔てたこの両作品の相似についての筆者の駄労解である。二作の接点を示す確実な証拠はないが、一筆記してみたくなったのである。もし、全くの誤解であっても、近世・現代のすぐれた小説家が相似た趣向（テーマ）で作品を物したことは、それはそれで面白いことではなかろうか。万が一この想像が正鵠を得ているとすれば、筆者の喜びこれに過ぐるものないが、その喜びは「剽窃」や「盗用」などという言葉とは全く無縁である。砂浜で一人遊んでいて、美しい貝殻を偶然見つけた時の喜びとでもいえばよかろうか。

II

さて、この二作品を未読の読者のために、まずは両作品の梗概を述べることから始め

ねばならないだろう。

まず、筒井氏の「夢の検閲官」のあらすじは次のごとくである。

作品の舞台となるのは中学生の息子をいじめで失い、哀しみのあまりキチン・ドリンカーになってしまった母親の意識内である。そこには夢の法廷が設営され、そこに登場するのは夢の検閲官と彼を補佐する初老の書記。つまり、酩酊状態となり、眠ってしまう彼女に夢を見せる脳内の機能が、擬人化されているのである。まず、このようなアイディアの作品は現代作家の中では、筒井氏にしか書けないと言ってよいだろう。

時刻は午後十一時半、母親は今夜も飲酒し、したがって夢の検閲官も書記もいささか酔っ払ってしまっている。（ここで、筒井氏の手になるアンソロジー『夢探偵』に収録された際、本作品に付された氏自身の解説にも述べられているフロイトの夢理論に触れなければならない。要約すれば、夢には安眠を続けさせる機能があり、眠りを妨げるようなショックや驚愕を与えるような夢はなるべく見せないように意識は働く。そのために意識内で行われる夢の検閲を擬人化したのが、この夢の検閲官なのである。したがって検閲官と書記の役目は彼女をショックで目覚めさせるような夢を通過させないことである。しかし、当然ながら彼女は亡くなった息子にまつわる夢をみることになる。）最初に廷内へ入って来たのは鉄筋コンクリート建ての、時計塔のある校舎。息子の通っていた中学校である。これは歪曲作業員によって彼女の記憶にある合掌造りの家屋に変えられる。しかし、時間が足りず、校舎は屋根の天辺に時計台があり、八畳の座敷の床の間に黒板のある、変な合掌造りのまま夢に現れることとなる。次に入って来たのは、彼女の主観によって凶悪な顔をした小杉大造という名の中学校の担任。これもメイクの女性によって和服に下駄履き、頭の禿げた老人＝島大造という名の彼女の叔父に変身させられる。次に現れたのは息子をいじめた同級生。これは丸刈りの頭をくっつけ合って、黒いトウモロコシに変えられる。これらを合成した彼女の夢は、屋根の上に時計塔が突き出たおかしな合掌造りの中の、数式などが書きこまれた黒板のある奇妙な部屋で、叔父の島大造が腐った黒いトウモロコシをむさぼり食っているというもの。検閲官は「わはははははは。よし。これならなんのことかわかるまい」と安心し、書記に次の者の入廷を促す。入ってきたのは甘さと香りがいっぱいの「やさしさ」である。彼女は息子が死んだのは自分にやさしさが不足していたと反省しているのだ。この「やさしさ」はスウィートネスからの連想でメロンにされ、夢の中の建物の周囲は一面のメロン畑となる。そうして、次に入ってきたのは色の白い、ひよわそうな少年。おとなしそうな様子で眼を伏せ、おどおどしている。これが彼女の息子で、当然のことながら毎晩現われるのであ

る。もう、歪曲、すり替え、象徴化、言い換えの手段も尽きた、と検閲官と書記は頭をかかえる。少年は困った表情でうなだれ、ふたりの前に立ちつくしている。今夜はこのまま戻らせようという検閲官に人情家らしい書記はおそるおそる進言する。以下、原文から感動のラスト・シーンを引用しよう。

「もう、この少年が死んで二カ月になります。そろそろこのままの姿で、夢に登場させてやったらどうでしょう。そりゃ、彼女は夢で息子と出会って、衝撃で、眼ざめるでしょう。さめてから、泣くことでしょう。眠れなくなるかもしれません。しかし、たとえ今夜はもう眠れずとも、それで少しでも苦悩が解消されるのなら、そうした衝撃はあたえて、少しずつ馴らしていった方が。それに、彼女は息子が夢にあらわれないことを不満に思っています。つまり、彼女が夢でこの子に逢いたがっているのは事実なのですから」

けんめいに言いつのる書記の顔を、検閲官は少しおどろいて見つめた。「お前、泣いとるのか」

書記はあわてて、涙を手の甲で拭った。「いや。これは。わたしとしたことが。ひひひひひひ」

少し考えてから、検閲官は声をつまらせながらも、ゆっくりと少年に言った。「よし。通りなさい。夢でお母さんに逢ってきてやりなさい」ほんの少し眼をうるませた検閲官は、にっこり笑って少年にうなずきかけた。「メロン畑の中を通っていけばいい」少年はうなずき返し、意識のドアに向かった。

ステージ・ドアの手前で、少年はふと立ちどまり、自分に注目している検閲官と書記をふり返る。

見送るふたりに、少年は軽く頭を下げ、微笑した。「ぼくを通してくれて、ありがとう」

Ⅲ

一方、山東京伝の黄表紙『廬生夢魂其前日』は前述のごとく寛政三年に江戸の本屋蔦屋重三郎店から刊行された。中本三巻三冊、全十五丁。一丁は二ページだから全部で三十ページの片々たる小冊であるが、大人の読者相手に、ナンセンスな御一笑を提供して終わる黄表紙という戯作が、このような体裁を採るのは、当時の書物に対する感覚としてまことに当然のことであった。見開きいっぱいに描かれた絵と、これはこのジャンルの先祖に当たる子供絵本に敬意を表したものか、殆ど平仮名で書かれた文章が一体となり、笑いをその主なる創作意図とした大人向け絵本というべきもの（但し、これは当然のことながら、その全てが傑作揃いとはいかない）。

このジャンルの嚆矢となったのは、安永四年（一七七五）恋川春町作『金々先生栄華夢』で、以来（というか、それ以前の草

双紙にも見られるのだが、特に『金々先生』以降は、その物語の発端と結末には多く夢の趣向が用いられることになったとされる。それから十六年後に刊行された山東京伝作の本書『廬生夢魂其前日』の趣向も夢である。しかし、さすがは京伝、一筋縄では括られない。まずは、彼の自序によって、その意図した趣向を伺おう。

序に出まするは市川団十郎でござい

哥　雨のふる夜はナア。ひとしほゆかし　なんといはつせへます。草冊紙のしゆかうに。ゆめがふるひといわつしやるか。やアこなさまのがもつともじや。したがふるきをたづねて。あたらしく書かゆるがすなはちしゆかうの。あたらしきといふもの。ふるひといわつしやるこなさまが夢か。あたらしひといふわしが夢か。うき世が夢か。夢がうき世か。嗚呼荘子じやナアチヤンチヤント爾云

《現代語訳》

長唄〝雨の降る夜はナア、ひとしほ、あなたのことが恋しく懐かしく思われて夢の中でもいいから会いたい　……何とおっしゃいます。草双紙の趣向に夢の趣向はもう古いとおっしゃいますのか。やあ成程貴方様のおっしゃることは御尤もです。ですが、古い趣向を新しく書き替えることこそが即、趣向の新しさと言うもの。この作をご覧になって「古い」とおっしゃる貴方様の方が夢を見ておられるのか。それとも新しいという私の方が夢を見ておるのか。浮世が夢か？夢が浮世か？ああ、そう、そう、荘子の胡蝶の夢の如くじゃナア。チャン、チャント（たけしではない）かくのごとし。

ちなみに、冒頭の「雨の降る夜は……」は富本節「花川戸身替の段」。天明三年初演「江戸花三升曽我」にも唄われる「雨のふる夜はひとしほゆかし。さへては月になほゆかし。お俊はひとり湯かへりに……」の一節のもじりである。

天明年間に最盛期を迎えた江戸戯作の中の洒落本・黄表紙、とりわけ黄表紙では、趣向の新しさ＝今まで誰も創作し得なかった新人作者の黄表紙は一作一作が実験作であるといえる。この『廬生夢魂其前日』において、京伝は使い古され、手垢も着いているが、黄表紙では、「屋久島の杉にも等しい」（何のことやら筆者にもわからぬ）「夢の趣向」に果敢（？）にチャレンジし、何とか新趣向の面白さを持った黄表紙を書こうと（恐らくは徹夜もして）頭を捏ねくり廻したのであろう。中国の『枕中記』、謡曲『邯鄲』で有名な「廬生の夢」は早くから草双紙の趣向となり、黄表紙というジャンルにおける「夢の趣向」を確立した観のある『金々先生栄華夢』以前にも、冨川吟雪（とみかわぎんせつ）が『浮世楽助一杯の夢』（宝暦十二年）、『初夢邯鄲の枕』、『邯鄲浮世栄花枕』（かんたんうきよ　えいがのまくら）（安永元年）、『風流仙人花婿』（安永二年）などの先蹤作を多く書いている。初期のこれ

らを含んで、およそ四十一年後にこれらの先蹤作に対する敬愛とともに、それを超えたい、新しい笑いを創造したい、そこに京伝の戯作者遊戯魂（というような言葉を使うのは、少し気恥ずかしいが）を見、それこそが京伝の創作力の源の大きな部分を成していたと考えてもあながち間違いではないだろう。

さらに、草双紙には、有名な日本の古典・昔話などに材を採り、その後日譚を筋とするものがある。例を挙げれば『浦島七世孫』（宝暦八年）、『扨茂其後白髪金時』（安永六年）、『後日菅原鑑』（同）、『桃太郎後日噺』（同）などであり、もっとも著名な作品は、作家の井上ひさし氏も激賞された昔話の「かちかち山」でウサギから泥舟で殺されたタヌキの子供が復讐を試みる『親敵討腹鼓』（朋誠堂喜三二作・恋川春町画。安永六年刊）があろう。

しかし、ある物語の前日譚（と仮に名付けてみる）を作品のモチーフとしたものは、この京伝の『廬生夢』が嚆矢ではなかろうか。やはり、京伝は尋常な作者ではない。

Ⅳ

さて、本書の梗概・内容についてはすでに、森銑三氏『續黄表紙解題』、中野三敏氏「山東京伝・洒落とナンセンス」（『国文学』昭和四十八年十二月号）に述べられているのだが、お二人のお書きになったものを未読の方のために、筆者なりに本書の内容を述べてみよう。謡曲『邯鄲』のパロディ草双紙として、また、日本近世文学史において、黄表紙の第一作とされる恋川春町の『金々先生栄華夢』の主人公「金々先生」こと金村屋金兵衛は、立身出世を志して、田舎より江戸へ出てくるのであるが、この金兵衛のモデルとなった本家本元の中国の『廬生夢』の廬生（謡曲『邯鄲』の廬生）は、初めから現実の栄華を諦め、「栄華の夢」さえ見れればよいのだと、眠ってばかりいる醒めた現実主義者（？）である。この廬生に、天上と人間界との中二階にある夢茶羅国のお頭である夢魂道人が、

「このたび唐土の蜀の国の傍らに住む廬生という者が、栄華の夢を見たがるゆへ、見せてやらずはなるまひ。しかしこれは、悟りの夢だから、一ト通りではゆかぬ。五十年ばかりの事を取組まねばならぬ。今度は、人形では間尺に合はぬから、歌舞伎にするつもりだ。みんな役をとって、稽古にかゝったがよい」

そこで、芝居の配役がなされ、大道具・小道具作りが始まり、念入りなリハーサルも行われて、いよいよ当夜、廬生が眠り始めると同時に芝居の幕が開く、ところでこの黄表紙はめでたし、めでたしと終わるのである。本作が謡曲『邯鄲』の前日譚という所以である。

この『廬生夢』の着想が、筒井氏の「夢の検閲官」のそれと酷似していることは、両者を併読すれば、どなたでもお認め下さ

ると筆者には思われ、これ以上の論証は必要なしと考えるのだが、それでは余りにも愛想に乏しく（？）、研究論文に不可欠の客観性・実証性・偏執性に欠けるであろう。作者の筒井氏に、『廬生夢』について、もし何処かのパーティで僥倖にして尋ねることができたとしても、そんな古い江戸時代の黄表紙（？）なぞ、「わしゃ知らん。なーんにも知らん」（『日々是慌日』昭和六十一年九月三十日の項〈『日々不穏』所収〉『日日不穏』〈中央公論社217ページ）と一蹴されれば、それまでである。であるから、しつこいのは承知で、両者の類似点を箇条書きに掲げてみよう。

①人に夢を見せる夢魂道人、部下達の「夢手合い」は擬人化（？）されていること。これは江戸戯作でもSFでも特に珍らしい手法ではないことは言うまでもないのだが、黄表紙にはその者達の姿を具体的に描かねばならぬので、ここで作者京伝は一思案が必要となる。原文に、

それ夢の形といふものはとうしたもんたといふに、男かと思へば女のごとく、若いかと思へはしらかもはへ、唐人かと思へば日本人のごとくどこといってつかまへ所のなきものなり（後略）

この夢魂道人は徳の高い孔子を思わせる風貌をしている（森銑三氏ご指摘・図1）が言葉遣いはまるきり大工の棟梁といったところがおかしい（中野三敏氏ご指摘）。また「夢手合い」と呼ばれる手下は皆頭に唐人の被る帽子のような物を被っているが、頭頂の所で結ばれている。これは枕（図2）をデザインしたものであろう（森氏ご指摘）し、夢を見ることを「夢を結ぶ」という、その洒落であろうとも考えられる（中野三敏氏ご指摘）。

この見開きの隅に、

この作者も夢の衣装付けには大ぶん手こずつたさうにござります

と、京伝の書き入れがあるが、これは本音であろう。

筒井氏「夢の検閲官」も同様に擬人化の手法を用いておられるが、そこに至るまで「毎日〳〵案じに頭をわらし」（悩ませる）たに違いない。

②夢魂道人が、いろいろな人物に夢を見せるために、夢手合いに命じて、芝居の大道具・小道具・人形等を作らせる所。

実は、この過程で生じる手違いによる（筒井氏好みの言葉を用いれば）様々のスラプスティック（ドタバタ）ギャグや夢手合い達のボヤキの書き入れが、まことに傑作で、それがこの作品の生命（＝京伝の腕の奮い所）であり、その証拠に、全十五丁の三分の二を占めているのである。このギャグには、昭和の戯作者を自任する（俵万智

さん『サラダ記念日』の」本歌取りである「カラダ記念日」中に自ら「戯作者敬白」と冠した一文あり）筒井氏のこと、笑って読まれること請け合いである。

例えば、次のような場面（図3）

熱のある人に見せる夢は高いところから突き落とされる夢なり。やつぱりつり人形の理方にてこしらえるなり。これも念のいる誂え向きの夢は竹田のからくり（細工・人形）の理方にてぜんまい仕掛けにするなり。もつとも山は張り抜き（張りぼて）也。

寝小便をたれる時の夢は人形のケツの穴へ水てつぽうをしかけるなり。かるがゆへに小便をする夢を見るというとゑて渋つて出かめるものなり。これは水てつぽうの具合の悪い時と知るべし。又寝糞をたれる時の夢も同し事なり。竹の筒へぬか味噌をつめて突き出す。やはりところてんの理か。（同）

（どこかの店の丁稚に寝小便をたれさせている夢手合い）「うう、水てつほうの具合がよくてはよき布団は堪らぬ。この夢を見るやつは足のつま先へ灸がものはある。こいつはところてんを売る看板に至極だ」（八丁ウラ・九丁オモテ）

この見開きに北尾重政の弟子で浮世絵のプロ京伝のこれもレイアウトの凝らされた画が付されているのだ。

③部下達がとんでもない、失敗ばかりして、訳の分からない判じ物のような夢をしばしば見せる。そうした夢は夢を見た本人にも訳が分からぬナンセンスにしてシュールなものとなる。道人（「夢の検閲官」では、検閲官と書記と）はのけぞって困惑し、部下を叱り付ける。

夢魂道人が夢手合いに言っている。

「近頃、神田辺のある学者が孔子を気取って『我いまだ夢にだも周公旦の夢を見ず』などとと高慢を言っているのでこいつに周公の夢を見せて肝を潰させてやろうと思う。また、吉原のさる女郎がある色男に心底惚れて、古歌に、

いとせめて恋しき時はうば玉の
よるのころもをかへしてぞねる

とゆうべも床着を裏返しに着て寝たそうだ。可哀想に、これにも色男の夢を見せてやろう」

こうした夢魂道人の配慮のもと、夢手合い達は準備に取り掛かるのだが、どうにもそそっかしい連中ばかりで、あろうことか、女郎に夢で周公旦に逢わせ、吉原とは、無縁な学者に色男と心中に出掛ける夢を見せる。女郎の戸惑いから発せられる言葉、色男と手に手を取って心中に出る学者の台詞の傑作なこと、気持ち悪さは原本の画〈六ウ・七オ〉と次の作者の書き入れに、代弁させて頂こう。

これらはからっきり思ひもつかぬ夢なり。夢半じ（夢占い）に半じさせても分かるまい。作者にも分からぬ。

④本人に見せる夢は芝居仕立てで（夢手合いが大道具、小道具などを作り、用いて）行われること。

『廬生夢魂』では歌舞伎狂言仕立て。「夢の検閲官」では一応、現代演劇（？）仕立て。

時事と戯れるのも黄表紙を書く際の作者の欠くことのできない一楽であった。しかし、笑いの中には相手の解釈の仕様によっては「危ない笑い」というのがあって、その題材の最たるものはこの時期の黄表紙作家の多くが武士であった以上、御政道に関するものとなろう。そして、この時（天明期）、政治は老中田沼意次の放逸な賄賂政治とその粛正である松平定信の寛政の改革によって様々な黄表紙作者に恰好の時事問題を与え、それを趣向とするのは早いものがちという観があった。

勿論、黄表紙作者も命は惜しいし、馬鹿でもないので御政道に関するストレートな風刺・批判はうまく回避するつもりが、老中田沼意次の賄賂政治及び、その粛正を図った松平定信の改革を題材に、天明年間には黄表紙の政道に関して時事ネタが最も多く取り込まれることとなる。その代表作が天明七年より老中松平定信が行った政治改革（いわゆる寛政の改革）を題材とした『文武二道万石通』（朋誠堂喜三二作、天明八年刊）『鸚鵡返文武二道』（恋川春町作、寛政元年刊）『天下一面鏡梅鉢』（唐来参和作、寛政元年刊）『孔子縞于時藍染』（山東京伝作、寛政元年刊）『黒白水鏡』（石部琴好作、寛政元年刊）などである。ところが、京伝の寛政三年の黄表紙である本作には、そうした時事批判はないようだ。なぜなら京伝は改革政治を揶揄したととった当局から、既に刑せられていたからである。もって、本作品は、はからずも「戯作は滑稽を専らとすべし」という万象亭の『田舎芝居』序文にのっとったかのようになっている。そして、筒井氏の作品には今から窺えば、早い時点で「いじめによる中学生の自殺」という社会問題が、既に取り上げられていた。それがこれら二作品の違いであるとはいえよう。読者諸賢はいずれがお好みであろうか。

こうした指摘を一つひとつしていると、「この園田某という男、愚直にして不識。その上、何とも野暮で仕様がない」という筒井氏（又は他の読者諸氏）の嘆息が聞こえてきそうな気がして仕方ない。が、まだまだ迂愚なる筆者の調査は続く。

さて、鋭敏な読者におかれては、筆者の説が万が一当たっているとして、それでは筒井氏は、いったい、どのような経緯で、一般の人々にはまず知られていることのない、この京伝の黄表紙を読んだのかという疑問を当然持たれるであろう。この点について、以下に筆者の推測を述べてみたい。

A、近・現代作家のうち、江戸戯作から影響を受けた作家は数多いと思われるが、特に黄表紙から受けた「衝撃」を繰り返し詳述しているのは井上ひさし氏である（氏が第六十七回直木賞を受章された「手鎖心中」は山東京伝の『江戸生艶気樺焼』を下敷きにしているのは今や周知のことであろうし、「決戦ホンダ書店」という作品もある。）

氏の初期の文章を紹介すると、氏は『パロディ志願』（エッセイ集1。一九七九年、中央公論社刊）に収められている「わたしにとっての戯作」というエッセイで、

このこと（大学浪人時代、御母堂と住んでいたアパートの隣のアパートに住む赤線の女性から誘われたが、断ってしまったこと）があってから、ぼくはますます偏屈な人間になっていったみたいです。せっかくのチャンス、それをつかまえることができない男なんてほんとにだめだなあっていうふうに思って、どんどん気持ちがちぢこまってしまった。ところがある日、図書館で「帝国文庫」（園田註、『黄表紙百種』は「續帝国文庫」に収録）という揃い本のなかに『黄表紙百種』というのを見つけた。黄表紙っていったい何だろうと思って読み始めましたが、一篇読んで腰を抜かすほど驚きました。

特に、氏を驚かせたのが、先述『親敵討腹鼓』のクライマックス、ウサギは切腹、それをタヌキが胴切りにすると、ウサギの上半身は鵜に、下半身は鷺に変じて飛んで行くという、喜三二得意のナンセンス・シーンであったということで、

「これ以来、眼からウロコが落ちました。この世にはこんな文学もあってよいのだ（筆者註、そう、良いのだ）と世界観まで変わってしまった」

と語っておられる。

井上氏と筒井氏のファースト・コンタクトは以外に古く、一九七三年の「平凡パンチ」九月一七日号に掲載された「〝脱・終末大作戦〟対談」（『筒井康隆スピーキング』出帆新社。一九九六年二月刊）である。しかし、この際には江戸戯作および黄表紙についての話題は出ていない。

B、両氏が自らの文学観や小説観を親しく語り合ったのは一九八三～九十二年の十年間であろう。この間「小説新潮新人賞」の選考委員をお二人で務めておられてからである（井上氏・筒井氏ともに数え年で50～60歳にかけて）。毎年新春号で作品募集がなされ、十二月号に受賞作が発表された。どの受賞作品も掲載頁の前には、お二人の対談による選評が載せられていた。

両氏が相ともに認め合う間柄であることは筒井氏の『腹立ち半分日記』『日々不穏』や『いつまでもダイアリー』の中に井上氏の作品に対する賛辞（これ迄刊行された井

上作品は一昨残らず読んでいる、という）が見られること。

一方で、井上氏が新潮社『筒井康隆全集』全二十四巻の完結記念パーティの発起人の一人を務めておられること、また筒井氏の『バブリング創世記』文庫本解説に見られる氏の筒井氏礼讃（とくに「鍵」という作品を筒井文学の極北とされているのは、さすがであると思う）によって明らかである（小説家の文章はそのままでは信じ難いという危惧を除けば）。したがって、この期間に井上氏が、このストーリーを大雑把に語り聞かせた可能性は非常に高い。

ここでもう一つ疑問が生ずる。筒井氏は京伝の原作を読まれて本作品を書いたか否か。読まれたとすれば、どのような本によって（例えば原本か活字本か、等）であるか。甚だ失礼であるが、筒井氏に原本が読めるとは思えない。とすれば、井上氏に梗概をお聞きになったか、或いは活字本でかということになる。現在刊行中の『山東京傳全集』（ぺりかん社）によって京伝の黄表紙作品は一般の人々にも読みやすくなった。しかし、筒井氏が「夢の検閲官」を書かれた昭和六十二年には『盧生夢魂其前日』が収められた『山東京傳全集』第二巻はまだ刊行されていない。ちなみに、『国書総目録』には、『盧生夢魂』の活字版として『近代日本文学大系黄表紙集』・『續帝国文庫黄表紙百種』（博文館）・『日本名著全集黄表紙二十五種』（日本名著刊行会）。複製本として『黄表紙四十種』の書名が挙がっている。さて、これらの活字・複製本の中で筒井氏が、京伝の原作を読んだとして、拠ったのはどのテキストか。先程の理由から黄表紙の複製である『黄表紙四十種』も除外させて戴く。

さて、又、筒井氏の日記の引用をさせていただく。

先ほど引用させて戴いた「日々是慌日」の昭和六十二年三月二十三日（月）の日記には、

去年のいつ頃からであったであろうか、ずっと散髪に行っていないので頭髪が三メートルにも伸び（自作の戯曲『ジーザス・クライスト・スーパースター』の公演のためである）、今日、三宮の「TIS」へ行く。帰途「薬菜飯店」を発見したあの理容室である。今回は帰途さんぱる五階の古書店街に行き、昭和三年発行の「浮世草紙集」（日本名著刊行会）と、昭和四年発行の「其磧自笑傑作集」（博文館）とを買い……（以下略）

博文館といえば正續帝国文庫の版元である。その續帝国文庫中の一冊に『黄表紙百種』がある。しかし、御存知の様にそこに掲載された『盧生夢魂』には画がなく、その文章のみが活字化されているのだが（まるで、筒井氏の「トーチカ」が雑誌『宝石』の初出時、苦心しながらひとつひとつの語に付けたルビを出版時、全部除かれて掲載されたというエピソードを彷彿とさせるような処置である）。

ここでもう一つ二つ調査してみたいことが持ち上がった。「夢の検閲官」の初稿が掲載された毎日新聞の挿絵。もう一つ「夢の検閲官」の決定稿が『小説新潮』載った時、それに付された挿絵である。井上ひさし氏『戯作者銘々伝』（中央公論社）の装丁をなさったのは山藤章二画伯だが、その表紙・見返しに描かれた画を見て一驚した。そこに描かれていたのは、京伝の黄表紙の代表作『江戸生艶気樺焼』の主人公艶次郎ならぬ、もろ肌ぬいだ井上ひさし氏の画だったからである。なんという秀抜さ。そういえば、何年か前の『週刊朝日』の「ブラックアングル」でも、万象亭の『従夫以来記』の一場面、人の酔っぱらいが、小酔が大酔を介抱しながら、歩いている画のパロディを見たことがある。かように江戸の戯作絵本は現代メディアに既に食い込んでいるのである。山藤画伯の辛辣な似顔絵については、ここで云々する必要もなかろうが吉行淳之介、井上ひさし、野坂昭如、筒井康隆他諸氏の連載エッセイに描かれた挿絵を見ると、挿絵をこれ程辛辣で面白いものをお描きになる人は他にいないだろうというのが筆者の考えである。

さて、『毎日新聞』そして、『週刊新潮』「夢の検閲官」の挿絵は誰と誰によって描かれたのだろうか。まさかとは思うが、黄表紙風に描かれていれば、もう何もいうことはない。

作者の淡い期待は当然のようにはずれていた。『毎日新聞』にはよく分からないシュールな挿図が付されていたし、『小説新潮』の方は、「当館は発刊されて十年以上経った大衆雑誌は廃棄してしまいますの」で今回閲覧できなかった。ああ、もっと早く図書館に足を運んでいれば良かった。「覆水盆に返らず」しかし、どこかにきっとあるのだから、何の心配もしていない。ただ、現在の時点では、その挿絵を確かめられなかったというだけのことである。

☹「ええい！この小うるさい考証はまだ続くのか。そんな無駄をせずとも、幸いにして筒井氏はまだご存命。御本人に問い合わせればよいではないか」そうした意見が当然出てこよう。そう。全くその通り。しかし、筆者はそれだけは避けたい。筒井氏の『腹立半分日記』一九七六年十一月十一日（木）の件に、こう記されているからだ。

あいかわらず変な手紙ばかりくる。多いのはアンケートである。

「このたび私は文化祭で（あるいは選択国語の時間で）作家の研究を発表することになりました。つきましては次の質問にご返事を」

そして質問が箇条書きにしてある。尊敬する作家は？　とか、自分で気に入っている作品は？　とかいったものである。こんなことならぼくは今まで何回も書いている。つまりこの学生は、まったく研究していないのである。じかに作家に問いただすなど、いわばカンニング

である。ぼくは学生のカンニングに片棒かつぐ気はないのである。こういう手紙は、すべて破棄することにしている。

いや、この論文が破棄されることは全く構わないのだが、「筒井日記」に実名入りで公開され罵られるのは真っ平だ。或いは氏に二、三ページ読んでゴミ箱へポイされるのも筆者としては辛い。そうならないよう、可能な限り自分の説について裏付けを示しながら、実証的に述べたつもりである。

しかしながら、さて、もし、筒井氏がこの稿をお読みになれば、どんな感想を抱かれることだろうか。稿を終えた今、机前で、最近撮影された筒井氏の御尊顔を眺めながら筆者は恐怖を感じている。ストックトン作「女か虎か」……。しかし、願わくば、あの『虚構船団の逆襲』に見られるごとき「恐怖のイリオモテヤマネコ顔面掻き毟りの刑」（本書における筒井氏の評論家批判を筆者は密かにこう名付けている）だけはやめてほしいものだ。

それでは、HELLO！

筒井康隆様。

著作権保護のため図は非表示

『廬生夢魂其前日』八丁裏・九丁表

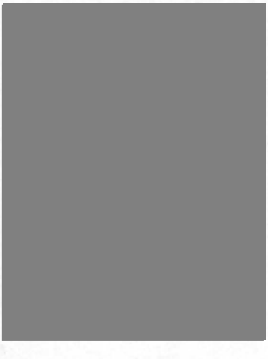

図2　『絵本見立仮譬尽』

『廬生夢魂其前日』六丁裏・七丁表